「女性初」を超えて

本当の闘いはこれから始まる

学校で、職場で、地域で。多くの女性がそれぞれの場所で「女性初」に直面し、勇気を持って壁を突破してきた。その先に、女性初の首相誕生があった。それは「女性初の時代」の終わりでもあった。

フリーランス記者　小野ヒデコ

東京都在住の40代の女性は、関西の私立大学出身。2006年、同大の女性として初めて、総合商社の総合職として採用された。他にも同級生の女性2人が同じように採用されていて、大学側は色めき立ったという。

入社後は、海外勤務を希望。6年目には、念願かなって駐在員になった。会社としてそのエリアでは女性初の駐在員だった。

時は第2次安倍内閣が「女性活躍推進」を打ち出す前だったが、女性が男性と同じように働くことは珍しいことではなくなっていた。女性は言う。

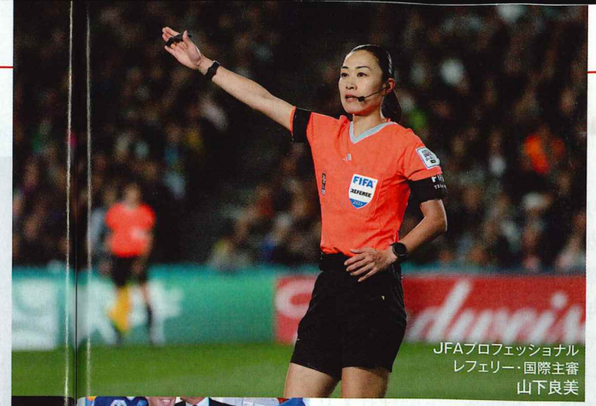
「学生時代から就職活動、そして入社してからも、男女の差を感じたことはほとんどありません」

「PR的存在」の思惑

だが一方で、「大学も会社の上司も、〝女性初〟を売りにしたいという雰囲気でした。私をPR的存在に仕立てあげたい思惑を感じていました」と振り返る。

女性は、特に気負うことはなかったというが、何をしてもついてまわる「女性初」が、ときに誇らしく、ときに少し面倒だったという。

1986年4月に男女雇用機会均等法が施行されてから、まもなく40年。いまの40～60代は、それぞれの人生のなかで一度は「女性初」を経験してきた世代だ。


JFAプロフェッショナルレフェリー・国際主審　山下良美

日本航空社長　鳥取三津子

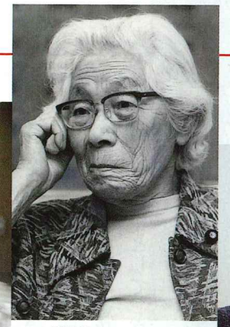
宇宙飛行士　向井千秋

将棋・女流五冠　福間香奈

登山家　田部井淳子

いちごボタジェ社長　田口沙緒理

この特集はAERA DIGITALでも展開しています


政治家　市川房枝

脚本家　内館牧子

小説家　金原ひとみ

2月にAERAが実施したアンケートでは「私の女性初」にまつわるエピソードが多く寄せられた。

勤務先でエンジニアの女性として初めて工場勤務を経験した東京都在住の女性(56)は、「自分が失敗したら後輩に迷惑がかかると思い、問題を起こさないよう、かなり気を使った。結果的に女性エンジニアの採用が増えたことを誇りに思う」と回答した。

生意気だと言われた

別の50代女性は、4年制大学卒の初の女性事務系職員として配属されたが、「過大な期待をされ過ぎて、マイナスにしか作用しなかった気がする。かと言って、斬新な意見を言うと、生意気な発言と言われた」と振り返る。

21年5月16日、Jリーグで女性初の主審として笛を吹いたのはJFA（日本サッカー協会）のプロフェッショナルレフェリーで国際主審の山下良美さん(40)だ。4歳からサッカーを始め、憧れのJリーグの主審。喜びの一方で「これまで女性の審判員が築き上げてきた信頼を壊してはいけないという責任感を感じていました」と振り返る。

22年のW杯では初の女性主審に選出され、「世界最高峰の大会に参加する覚悟は必要でしたが、男女の違いに関しての気負いはありませんでした」と山下さん。それでも、屈強な男性選手と並ぶと、166センチの体格は小さく見える。審判員同士がコミュニケーションを取るための機器を両肩に装着することで肩幅を大きく見せたり、あえて男性選手とは距離を取って目線の高さを合わせたりする工夫は欠かせないという。

道なき道をゆく、誇りと気負い。それは何も職場に限っ

内閣総理大臣　高市早苗

国連難民高等弁務官などを歴任　緒方貞子

俳優　黒柳徹子

元大阪府知事　太田房江

日弁連会長　渕上玲子

冒険家　続素美代

元社民党党首　土井たか子

元バレーボール女子日本代表監督　中田久美

photo　本人提供（田口さん）、©JFA（山下さん）

photo　朝日新聞社（13～15ページも）
写真映像部（内館さん）　敬称略

たことではない。

たとえば「高校で初の女性生徒会長」「小学校の登校班の班長を女子で初めて任された」「アルバイト先で女性初のチームリーダーになった」――。日本全国の学校、地域、勤務先で女性たちはいくつもの壁を突破してきた。

『「日本」ってどんな国？』などの著書がある教育社会学者で東京大学大学院の本田由紀教授は、こう話す。

「様々な圧力も背負いながら、切り抜けた先に、次の女性につながる轍ができてきたのでは、と思います。でも、まだマイノリティーであることは変わらず、プレッシャーは続いているはずなので、それぞれが個人として堂々と振る舞える状態になることが、望ましいと思います」

25年10月、日本の憲政史上初の女性首相として、高市早苗第104代首相が誕生した。喜ぶ声がある一方で、高市首相が就任後に「働いて、働いて、働いて参ります」と発言したことを「男性中心社会が美徳としてきた長時間労働を肯定している」と批判する声があがったり、選択的夫婦別姓制度の導入に慎重な姿勢を見せることに失望したりする女性たちがいる。

「女性にも様々なタイプがいます。当たり前ですが、高市首相と同じ考え方や振る舞い方を、すべての女性がするわけではありません。性別が同じだけで、一括りにされることにモヤモヤを覚える女性は多いと思います。私もその一人です」（本田教授）

また、外交時に高市首相が過度なボディータッチや笑顔を振りまく姿に対し、本田教授は「周りに媚を売り、可愛がられることでしか女性が首相になる道がなかったのだとすれば、それは悔しい以外の何物でもありません」と話す。

来日したトランプ米大統領と高市早苗首相。各国首脳と笑顔で交流する高市首相を評価する声と批判的な視線が交錯する＝2025年10月28日

いわゆる「名誉男性」

岩手大学副学長の海妻径子教授（ジェンダー論）もこう指摘する。

「高市首相は男社会に合わせて働いてきた、いわゆる『名誉男性』と呼べる女性で、男性が持っているものを奪おうとする人ではありません。一方で男性側は『有能な女性を取り立てている』と言えて都合がいい。そういう人が登用されたに過ぎません」

ただ一方で、高市首相を支持する女性たちも多い。その理由について、海妻教授は、「男社会に迎合しなければ生きていけなかった時代を誰もが知っているからでしょう。1992年に育児休業法が施行されましたが、総合職の女性の多くが『子どもを産まない覚悟』をしなければキャリアを続けることができない時期が長く続き、多くの優秀な女性たちが夢破れて去っていきました。その矛盾を高市首相に重ね、共感する女性は多いと思います」と話す。

キャリアと出産・育児がトレードオフだった時期を経て、仕事を意欲的にこなす「バリキャリ」という言葉が流布したのが00年代。両立支援策が整い始め、現在では男性が育休をとり、保育園の送迎をする姿も珍しくはなくなった。仕事もプライベートも同じ熱量でこなす「フルキャリ」の女性が増えている。

そんな日本社会に誕生した初めての女性首相。海妻教授は「『女性初の時代』の終わり」だと指摘する。

「私たちはなぜ『女性初』にこだわってきたのか。それはセクシズム（性差別主義）から自由になりたかったからです。男性中心社会だったころ、『女だから任せられない』と言われたことを乗り越えて、ついにガラスの天井を破る女性が出た。時代は次のフェーズに移りました」

それは、性別にとらわれず「自分の人生を生きる」ことを目指すフェーズだ。

宮崎市と東京を行き来し、いちご園やJリーグクラブの食堂の運営をする「いちごポタジェ」社長の田口沙緒理さん(40)は23年、グループ企業内で初の女性社長となった。

仕事との二択ではない

就活をしたのは、リーマンショック前で男女関係なく採用が決まっていく「売り手市場」だった。08年に新卒で大手外資コンサルティング会社に入社。同期約350人の約4割が女性だったという。

「でも、全社を見ると管理職以上の女性は少ないのが現状でした。年1回、女性だけの研修が開催されていましたが、女性特有の働きにくさがある前提で開かれていたのかもしれません」（田口さん）

研修では、ロールモデルを探すというテーマがあった。田口さんは当時から家庭を持つより仕事に注力する将来像を描いていて、そのように働く先輩に知り合えたことが励みになった。一方で、子どもを持つタイミングを考えあぐねている同期は、育児と仕事を両立しているロールモデルを見つけていたという。

「様々なパターンがあってよしとされている安心感を抱きました」と田口さん。今も結婚はしておらず子どもはいない。「女性初」世代として、仕事に情熱を注ぎ、自分らしい生き方を体現してきた田口さんは、若い世代についてこう語る。

「一回りほど年下の社員たちを見ていて、多様化をとても感じます。仕事か子育てかの二択ではなく、『自分はどうしていこうか』と悩んでいる印象です」

妊娠を喜べず苦しい

神奈川県在住の女性(27)は、大学卒業後に子ども向けのアウトドアなどを運営する会社に就職。この業界で働く女性はまだ少なく、女性初の正社員だった。

保護者からは、女性社員がいると安心感があると声をかけられた。キャンプ中に生理が来てしまい戸惑っている女の子をフォローするなど、女性だからこそできることは多く、充実感を感じながら働いていたが、昨年、退職した。

「これからも子どもたちに体験の場を届けていきたいと思っています。私自身、ゆくゆくは家庭を持ち、子育てをしたいので、このタイミングで独立しました」

好きな仕事と子育て。どちらか一方ではなく、両方の夢を実現するための選択だった。

このような生き方をできる時代になりつつあるが、組織によっては大きく後れを取っているケースもある。

昨年12月10日、将棋の女流六冠（当時）の福間香奈さん(34)が記者会見に臨んだ。日本将棋連盟の規定に「出産予定日の産前6週から産後8週までの期間が、タイトル戦の日程と一部でも重複すれば対局者が変更される」とあり、出産かタイトル戦を優先するかの二者択一を迫られ、一部のタイトル戦の対局が不戦敗になっていた。

日本将棋連盟が定める妊娠・出産をめぐる規定の見直しを求めて記者会見する福間香奈女流六冠（当時）＝2025年12月10日

「将棋は私にとって全て。妊娠を喜べず、苦しかった。第2子を持つことはもう無理だと絶望的な気持ちになった」と涙ながらに訴えた。

その後、日本将棋連盟は問題の規定を削除することを発表。4月末までに新たな規定が出される予定だ。福間さんによって、壁がまたひとつ、こじ開けられようとしている。

生きやすさは先延ばし

新たなフェーズに進む社会を女性たちが、そして男性もより生きやすくするために欠かせないことは何か。妻の海外赴任に同行し、米国で「駐夫（ちゅうふ）」を経験した千葉科学大学危機管理学部教授でジャーナリストの小西一禎さん(53)は、「意識と構造がシナジー効果で共に高まっていくことで、より生きやすい方向に社会が変わっていくでしょう。男女の差が小さくなっていくことで、男性が与えられた副産物も大きいはずです。男性自身が自分たちも多様性が認められ、自然に生きられる世の中になっている点に目を向けてほしいです」と指摘する。

それは「家事育児は女性がするもの」という意識を、男性も女性も変えることから始まるのかもしれない。OECD（経済協力開発機構）のデータによると、日本の女性が担う家事などの無償労働の男女間格差は加盟国の中でも特に大きい。

25年6月に発表された世界経済フォーラムの「ジェンダーギャップ指数」でも日本は前年と同じ118位で、先進国の中では最低レベルだ。

「ジェンダー平等を進めていっても構造が変わっていないので、このままではゆくゆくは破綻します」（小西さん）

高市首相の誕生で、区切りを迎えた「女性初の時代」。前出の海妻教授は「女性初の首相の誕生は喜ばしいこと」としたうえで、こう話す。

「女性が自由に生きられるようになったように見えて、実は生きやすさは先延ばしされています。本当の闘いはこれからです」

2025年 ジェンダーギャップ指数

前年順位		順位	国
1	→	1	アイスランド
2	→	2	フィンランド
3	→	3	ノルウェー
14	↗	4	英国
4	↘	5	ニュージーランド
5	↘	6	スウェーデン
13	↗	7	モルドバ
8	→	8	ナミビア
7	↘	9	ドイツ
		⋮	
43	↗	42	米国
		⋮	
94	↘	101	韓国
		⋮	
106	↗	103	中国
		⋮	
118	→	118	日本

※世界経済フォーラムの発表資料から作成